

文化形成を基礎づける歴史地理学

はじめに

板 倉 勝 高

本稿は日本歴史地理学研究会の第一回例会のために準備したものである。種々の事情によって詳細にわたるリサーチよりも大所高所よりみた概観を望まれたので、日頃から歴史地理学のあり方について思っていた事を述べて、その責をふさぐことにした。

在来我が国における歴史地理学の研究は、主として近世地方資料などを根底資料とし、精密な実地調査によつた村落研究が多く、まれにはマヤ文明の発生について述^{註1}べられたものや、季節風と古代交通について論じられたものもないわけではないが、その数は割合に少ない。そのため古文書を資料にする地理が歴史地理であるとさえ觀念される程である。筆者の場合^{註2}にしてからが、残存した庄園文書によつて村落構造を研究した次第^{註3}であつたが、果して歴史地理学^{註4}の対象がこのように狭い範囲に限られていてよいのであろうかとは、当時から疑問に思つていた所であつた。このような歴史地理学の本質についての疑問は筆者ばかりでなく、先学吉田東伍^{註5}小牧実繁^{註5}両博士をはじめとして、多くの論文が発表されており、藤岡謙二郎教授が新地理講座に参考文献を紹介した時に『……歴史地理の特論に関する参考

文献はその数が極めて多いために、一般の歴史地理関係の論文と共に『省略』^{註。}せざるを得なかつた程である。その上に浅学菲才の筆者が一篇をつけ加えることは、大海に一滴の水を汪くに似て恆惛たらざるを得ないから、本稿では特に形而上学的、抽象的体系的規定をさけ、具体的・実際の方面から歴史地理のあり方をみ察してみたい。そのため(一)、現在歴史地理学は他の部門からいかに必要と考えられつつあるか、(二)それは各地域事情と号するものと同じか、(三)歴史地理学と一般人文地理学との関係如何という順序で論をすすめる。

歴史地理はいかに要請されているか。

本稿は特に形而上学的分類には興味を抱かないから、政治学法律学・芸術学・国語学・社会学・歴史学など具体的な学問分野について、筆者の狭い見聞の中から、歴史地理的考察が必要であつた例を考えてみたい。

政治・法律学 この領域は特に實際的な係争に関連するもので、最近熱海市泉区の所屬をめぐる静岡県と神奈川県に係争が新聞記事を賑はしたことがある。泉区は古く伊豆山神社の社領に属したもので、通常嶺線で町村の境界がきめられる例に反して、千歳川を以て、神奈川県湯河原町と熱海市泉区との境界としている。しかし泉区の住民は日常生活には熱海市の集落よりも湯河原町を利用すること多く、殊に小学生・中学生は嶺線をこしての通学は困難であるため、湯河原町の学校に委託している有様である。しかも泉区は湯河原温泉の延長として温泉旅館や別荘が多く、これから徴集し得る固定資産税・住民税の額は些少なものはない。事実泉区は生活環境としてのサービスを湯河原町に依存しているのだから、泉区は当然湯河原町に属し、これらの地方税は神奈川県が收受すべきだという一方の主張と伊豆山神社領に根拠をおく静岡県側の主張とが対立し、その裁定のために歴史地理学者として令名高き浅香幸雄助教授の意見を徴さねばならなかつたと報ぜられる。これらをもっとも實際的な場面において歴史地理学が期待された

例であらう。

次に現在日本人としては忘れることの出来ない千島・小笠原諸島帰属の問題がある。今小笠原諸島についていえば、文禄二年（一五九三）小笠原貞頼による発見以後、文政一〇年（一八二七）英艦ブロッサム号による英領宣言、天保元年（一八三〇）米人移住、嘉永六年（一八五三）ペリリによる首長任命などと諸國の權利主張が錯雜し、これは一応明治八年解決しているが、米軍が占領している現在としては、米國側で、領有の主張をなしうる根拠としてペリリによる首長任命は、實質的領有の事實があげられる。しかしながらこの以前天明五年（一七八五）林子平はその著三国通覽図説の一部として「無人島大小八十余山之図」を表わし、これをイルクーツクで入手したフランス人クラプロートが翻譯し、天保三年（一八三二）パリで刊行した。（このため西洋人は *Bonin Is* と稱した。）後キヤムフアーがこれを英訳し、ペリー自身がこれによって日本來航以前に *Bonin Is.* が日本に属することを確認している。^{註7}

千島・小笠原・沖繩の帰属は今後も樂觀は出来ないが、小笠原諸島に関しては、決定的な説明であるが、これらの考証資料の整備に当られた外務省川上事務官は、京大地理学科の出身で特に歴史地理的研究を實際面に適用された例として興味深い。

筆者も亦驥尾に付して、日本・オーストラリア間に係争中であるアラフラ海における真珠貝採集問題について歴史地理学的根拠を調査して、國際裁判の資料とした事がある。^{註9}

法律学の領域では、民族上の問題点として物權變動の際占有の効力についての問題がある。^{註10}これは契約発効の時期を都市的商業的社會組織を基礎としたローマ法の理念と、部族的・土地法的共同社會的基礎を持つゲルマン法の理念とのいづれをとるかによって反対の結論に到達するものであるが、この是非を定めるためには、この両者の成立した歴

史地理的背景を知らなければ、抽象理論に墮して本質を失うことになる。歴史地理学に要請された大きな部門といへべきであろう。この他、相続権の問題で山形県飛島の蛸壺の相続権が女子にのみあるというのは相続の例として珍しいものであるが、この特権な事例を理解するには蛸壺をめぐる歴史地理的背景が知られなければ、この女子相続の意味を知ることが出来ない。又諏訪地方に末子相続の例があるが、これ又、末子相続の意味を知るためには、この末子相続を成立させた環境を知らねばならぬ。このような必要に迫られて、近時法社会学の発達をみたが、その研究方法は一面で実態調査と号して、これらの事象をとりまく環境から、事象の持つ意味を究明しようとしている。

芸術学 芸術史の立場で歴史地理による考証が必要であった例は枚挙に暇があるまい。この領域では、技術・形式の地理的伝播は前提的な事として了解されているためにかえって、伝播自体を主たるデータにした著書に乏しい位である。ルネサンス以後においてもフランドル地方の絵画やデマラーの手法が他地域に大きな影響を与えているが、この形式史上の考証は、歴史地理的な環境分析から出発したものである。又近く日本の例をとれば余りにも有名な法隆寺註13や正倉院御物の問題註14がある。法隆寺の場合を見れば、壁画や建築様式、例のエンタシスなど話題は豊富であるが、今玉虫厨子や天蓋などに現われたから草模様を例にとる。この飛鳥文様と言われるから、草模様は、その後日本では裝飾用として広く普及したが、その原形はギリシヤ及び西アジアに用いられたハネサツクルから出たものだという。飛鳥文様は中国六朝時代の文様と同じであり、山西省雲岡の石窟註15に同型のものがあり、洛陽附近の竜門にもある。そしてこれにより古く甘肅省墩煌とんこうに見出されガンダーラにもササン王朝のイランにもその痕跡が追及され、東ローマの後であるトルコにもその形式が現われているという。このような伝播がいかになされたか、そして各地域によってどのような特徴があり、それがなぜ起ったかなどの考証は全く歴史地理的なものである。私のこの領域に関する知識は

至って狭いものであるが、この種研究者が芸術専攻の人であるために、論証の方法が多分に直観的であるように思われる。から草とかハネサツクルとかは凶案風にデフォルメされてくると、光焰や他のつる草と区別のつかぬこともある。又A・B両地に同じものがあっても、その事だけでは伝播によつたものか、原因を異にした同時発生のものかも、と厳密な吟味を必要としよう。そしてこれらの事は、この種文化事象を背景乃至環境の中において、理解しようとする歴史地理学者のために残された課題であるといえよう。

宗教学

およそ歴史地理と呼ばれるものでこの分野程老大な研究が直剣に行われた所はあるまい。バイブルの歴史地理に関する文献は、^{註15}文字通り汗牛充棟もただならぬものがあり、特別の研究をエルサレムにおいているものも一二にとどまらぬ如くである。これはバイブルの記事がもつ歴史地理的環境が理解されぬとバイブルの意味が明らかにならないからである。わかりやすい例をとるならば「よきサマリヤ人の譬」^{註17}がある。この記事の中で強盗におそはれたサマリヤ人を助け介抱したのがサマリヤ人であり、質問者である法律学者（イスラエルの指導者階級）にイエスが「あなたも行って同じようにしなさい」と言っているのは、何も知らない者が読んでも感動する所だが、このサマリヤ人のおかれた環境を知るとこの譬は更に深刻なものとなる。サマリヤはヨルダン川の西方で「全パレスチナの中で力と豊沃と美の結合せる地位としてサマリヤの右に出るものはない」^{註18}とされているが、この地方の住民はBC七二二アツミリアによるイスラエル俘囚の時、イスラエル人でない人々をこの地に移住せしめ、これらの人は残されたイスラエル人と離婚した。そのためこの地の宗教は多少異教的色彩が強くなり、宗教と人種の純潔を信条とするイスラエルとは互に軽べつし合い決して円満ではなかった。この事はルカによる福音書でこの譬がされる直前にイエスの弟子がこの町を焼きはらうべきではないかと提案した事によつても知られる。したがってイスラエル人にとっては軽べつす

べき敵であるサマリヤ人を例にとつて賞賜したイエスの教訓は、正統派の法律学者にとつては非常な皮肉である。のみならず、この事によつてイエスによる救済がユダヤ人のためでなく、もっともべつ、視された異邦人のためのものであることを示して高きものが低くせられ、打捨てられたものが隅の首石となるイエスによる救済の本質を語っている。このようにサマリヤ人に関する歴史地理的知識は直接に聖書釈義の基礎となつていのである。^{註20}

この歴史地理的実証の研究は、特にハルナックによる自由主義神学以後刺激されたテキスト・クリティックの進歩から必然的にバイブル本文の考証に進み、考古学の隆盛と相まつてますます発展し、カトリック側もこれに対抗して、実証的研究に努めた。そしてヘブル史の研究と共に旧約時代を知るためには、歴史地理的環境の理解なしには聖書の本質にふれ難いことが知られた。創世記に記されたバベルの塔やノアの洪水が必ずしも伝説ではない事はしばらくおき、^{註21}モーゼによるエジプト脱出の経過や、レビ記・申命記などにおける律法をとくかぎは当時の社会生活環境の上にあるが、この仕事は歴史地理に委ねられている。時代を降つてサムエル書におけるダビデ王の事蹟について、現在の解釈はこれを単なる英雄説にとどめない。^{註22}サウル王の手を逃れて流浪するダビデと、あるいは支持あるいは敵対した諸部族の社会的基礎の如何は、同時にダビデ王国の性格を決定するものであるが、これ以上の研究はもはや文献のみによる段階ではなくて、ダビデ時代の治乱抗争の歴史地理的理解の上に進められなければならない。又あのエレミヤの悲痛な叫びを、バビロニアエジプト両強国にはさまれたユダヤの政治地理上の立場を考えないで理解する事が出来ようか。予言者エリヤの活動(キリストはエリヤの再来とみなされた)の意義を、アハズ王時代のサマリヤを知ることなしにどうして知ることが出来よう。^{註23}このような必要にもとづいて、パレスチナ地方の歴史地理的研究は進み、そのためハンチントンによる気候脈動説は、この地方に関するかぎりは適確な資料によつて否定されるに至つた。^{註24}

国語・国文学

外国でもっとも研究の進んでいる地域がバイブルのバック・グラウンドであるとすれば、日本での実際の考証が、密にされた所は万葉集註25の歴史地理であろう。万葉集卷一天皇登香具山望國之時御製歌の微妙な感覺を知るためには、自らを大和平原の南、天香具山に立つて半ばうめられた埴安池をのぞみ見る必要があるうし、卷三天皇御遊雷岳之時柿本朝臣人麿作歌にうたわれた「天雲の雷」なるものが低い丘陵であることを知れば、『岳の名によりてただに天皇のはかりがたき御いきほひを申しける』とした賀茂真淵の評よりも、女帝をかこんだ和やかな君臣和樂のピクニックの風景が似つかはしい事はいうまでもない。又大海人皇子勢と大友皇子勢との決戦の風景をうたったという卷二高市皇子尊城殯宮之時柿本朝臣人麿作歌にしても、吉野脱出後の大海人皇子の足跡と、これをめぐる古代豪族の向背を知らないでは、真意に遠いといわざるを得まい。

経済学・社会学

この部門では殊に地域研究の必要が痛感され、地方史研究の隆盛は日本のみならずフランスにも、イギリスにも共通註27の事であるらしい。フランスでは村落共同体の研究が、イギリスではパストンレーターズの研究が盛註25のようであるが、それにはかつて華々しく論じられた集村散村起源論などが輝やかしく実をむすび、その考察がより深められて、村落共同体についての分析が一步前進した事は悦ばしい。

この他考古学であれ、民俗学であれ、例をあげれば無数にあるが、これら文化形成をあとづける文化科学にとって、地名の考証や景観復原だけでなく、本来的な歴史地理学的基础を必要とする。それでは本来の歴史地理学の立場はどのようなものであるか。又このように要請された歴史地理学と、文科諸科学の各部門において、すでに手をつけられたこれらの歴史地理的研究——歴史的地域事情と歴史地理との差別はどのようなものであるだろうか。

地域事情と歴史地理学

歴史地理学がこのような必要に迫られて、各地方・地域乃至各国の歴史地理を研究しその業績を記録すると、その対象とする範囲は極めて広範囲にわたり、殆んどすべての学問分野・すべての時代・すべての地域に及ぶことになる。そして歴史地理学は総論的なもの以外は、すべて各地方・各地域のケース・スタディに立論の基礎をおいているから、歴史地理学の各論は、各地域事情乃至各地域史・地域誌と相似たものになり得る。各地域事情についての説明は、歴史・経済・政治・産業・商業・金融などさまざまな立場から説明されている。これらの各地域事情と歴史地理学の研究結果としての各地域事情は、これが地域理解のための研究乃至説明である点については本質的な差別はなし難い。しかし一つの特徴がありうる。その特徴は、この地域に対するアプローチの仕方が、他の歴史・経済・政治・産業・商業金融などの立場からされた地域研究といささか異なる事である。それは、研究せんとする事物（歴史・経済・政治・産業等）を観る時に、それをとりまく *Perspective* において観察し、*Background* において理解するのである。必要ならば『世界内存在である所の一つの事物についての世界と事物との関係的理解』といつてもよく、もっと通俗の言葉で、事物を理解せんとする時それをとりまく環境の中においてこれを理解しようとするということについてもよい。より簡略に言えば事物の環境的理解といつてもよかる。勿論環境という言葉は *Milieu* であり、これはまず中心になる何物かがあって、それをとりまく四囲という語義である。したがって一つの地域内の事物を無暗と列挙して、地域の事情を説明したと信ずるのは過誤もはなだしいものであって、四囲の説明がその事物の本質を浮彫にするような説明でなければならぬ。他の部門の立場を持つ説明者と異なるのはこの点であって、この人達の解説の多くは、これをとりまく環境には重きをおかずにその事物のなり立ちについてのみ語る。そこで同一の事物を観て、各部門の研究者が観た結果と、歴史地理研究者が観た結果は異なるものとなる。観る事物は同じでも、これを観る角度、こ

れを観る方法が異なれば、その結果が同一になるとは期待し得ない。同じ班田収受の法令を観ながら、歴史学者の想倒せざる事実をつかみ出した京大地理学教室の業績はその一つの例である。

例えばここにトルコの金融史乃至金融事情について歴史地理研究者が調査研究、発表して悪い事はない。否語らねばならぬが、それは経済新聞の記事や、商社・銀行の駐在員が語るトルコの金融事情とは別の事実が発見されなければ歴史地理研究者としての意味はない。あるいは観られた金融形態は同じ事を確認しても、それに対する解釈の中に、何か新しい発見があるべきである。他の分野のレポートをアレンジしてその地域の事情を説明したりと信ずる向もあるかにきいているが、そのようなものはジャーナリズムではあっても学問ではなく科学ではない。たかだか地理ではあるかもしれないが、地理学にはなり得ない。一つの事物についての新しい発見、新しい解釈がないからである。方今各地方地域の社会・経済史的事実を列挙して、地誌と号するものが世間にもてはやさるる如くであるが、これらかなり啓蒙的であり、且つ在来の地理学が脱却しきれない非時間的觀察の弊を指摘した点で多大の功績はあっても、これをもって地理学の成果であるとはなし得ないものである。

これらの点からみると、歴史地理学は、いかなる分野の事象についても、それについて環境的理解が要請されるかぎりにおいては、されを対象とし研究しなければならぬ責務を負うているものである。このような実際上の要請があるのに、歴史地理学は独自の対象を持つべきであるとか、他の諸科学とは異った分野を持たねばならぬとかの言をなす者があるのは当を得ない。これは在来地理学一般が、その学問的業績に乏しいの余り、科学としての自信を失い、自己の領域だけでも確保しようとして、しきりに地理学の独自性を云々した。あの劣等感の現われの一つであろう。事実他の学問分野においては、経済学の、歴史学の、法律学の独自性などという言葉は不用の言葉であった。その学

問分野が互に重なり合うのは当然の事で、歴史学も社会学も経済史学も一つの村落問題を追及して誰も不思議には思わぬし、量子理論は物理に属するか化学に属するかという事は誰も心配しはしない。ただこれらのものが共通して念願していることは、各自のなしていることが論理的・実証的な科学として、新たな発見・新たな解釈が出来るかどうかという事で、これが経済学としてみとめられるかとか、これが社会学として通用するかという事ではない。経済史を研究するものが、これは歴史的経済学が、経済的歴史学などと迷ったり非難されたという例を、私は未だ不学にして知らない。歴史地理学が他の諸科学と明らかに異なるのはそのアプローチの方法、観察の態度——方法に他の諸科学研究者の思つて及ばざる独自性があるので、これこそ地理学の独自性と特筆大書してもよいが、それは対象が異なるのではなくて、事物に対するアプローチの方法の相異である。

現在、もっとも研究されている範囲で歴史地理学と共通の分野を持つものの一つに地方史研究があるが、これらは明らかに歴史地域を当面の対象としているわけで、歴史地域の研究が歴史地理学個々の分野であるとは誰も考え得ない。ただその結果として出来たものを見る時、地方史研究者は、事物現象の存在自体を重視し、地域の環境的理解に不足することは、地方史研究者の限界を示す所で、だからこそ、地域の環境的理解のために、歴史地理学が要請されているのである。

今歴史地理研究者が自らその分野を歴史地域だけに限ると次のような結果になる。地域とは元来対立的な観念で、地域研究は、事物地域の差別を知ることによって、事物の本質を探るために行われるものである。だからこそ地域という言葉があつて他の地域との区別をしている。しかしこれによって知られる事物の本質は何も地域的な観念ではないから、経済学的事物なら経済学、歴史的事物なら歴史学のためになされるものである。歴史地理学が各歴史地域を研究

して、地域をこえた一つの事実乃至法則を知る。しかしこれは歴史地理学の対象ではないから、他の学問に属すべきものだといったら、歴史地理学は永久に他の諸科学の奴婢たるの地位に甘んずるものとなる。事実そのような臭がしないでもないのは、歴史地理学が地域を超えた一つの体系、一つの法則、一つの理論を生み出すことに乏しかったからである。今ハンチントンの例をとれば、私見は論証の方法に杜撰な点があつてその結論には満足出来ないが、彼の行った意図は^{註29}とにかく文化に対する一つの理論を建てたことであつて、あれは地理ではないとか、あれはジャーナリストだとかいう非難をなすものは、自らかえりみて地理屋ではあつても科学者でないのではないかと三思すべきである。

一般的に経済史とか、社会史とか歴史地理学以外の分野で形成された理論は当然の事ながら抽象的な場合が多い。それが極めて完成された理論であればある程、果してそれが具体的な一つ生活体としての場、例えば一つの村に實際にありうるものであるかという疑問を禁ずる事が出来ない。最近における地方史研究の盛行はその欠をおぎなわんとするものであろうが、なお前述の如く環境的理解に不足しているのが実際の姿である。だからここに一つの部落の資料でも発見されれば大部の報告が出版され、水利・地割・階層構成云々と詳細な分析がされるが、それが一つの生活体としては認識され難く、百様を知って一様を分け難きの感をまぬかれ得ない。あるいは一つの村落の資料で幾冊もの著書が公刊され、それがその地方全体の性格を示すものの如き印象を与える。つまり、その理論は具体性を失い、本来実証的なるべき科学が、実証性を失うに至る。ここに本来的な歴史地理学が要請されてくる。事物の背景による理解・環境による理解、乃ち世界的理解を説明して抽象化された理論の誤を正し、具体性を与え、実証性を回復するのは歴史地理の方法による以外にない。かくて歴史地理は、すべての文化形成に関する説明——文化科学を基礎づける役割が与えられており、歴史地理的理解を持たない文化理論は空論に終るといわねばならぬ。この意味で歴史地

理学は、かつて地理学が諸学の母であったとは別の意味で人間活動の記録である文化発展を研究する文化諸科学を、根底において基礎づけているといわねばならぬ。歴史地理学が文化発展を基礎づけているものであるという所以である。

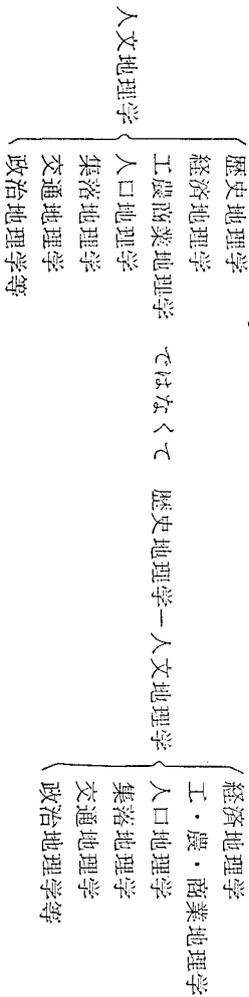
歴史地理学と人文地理学

かく説明して来ると、本来的な歴史地理学は一般の人文地理学と、どのような関係にあるかが問題となる。今迄のべて来たった歴史地理学の語を、人文地理学とよみかえて不合理を生じるであろうか。結論からいえば、歴史地理学の現代に当る部門が一般人文地理学であるといつてもよい。ただそれには人文地理学に今も少しは残存している、事物に対する平板な、非時間的考察を排除し、事物の存在形式は空間的存在のみではなく同時に時間的存在である事を想起しなければならぬ。単にある時点における商店や工場の分布図を画いて何事かを説明し得たりと信じたり、多摩川大橋の上に立つてトラックの台数を数えて何事かが分つたと信ずるものは、事物の存在形式を失念したもので、一つの情報であり、ルポルターデュとしてはみとみられるが、科学の名に値しない。地理であっても地理学ではない。地理学である限りにおいて、空間的な地域考察のみには停まり得ず、時間的な、歴史的な考察をも含まねばならぬ。歴史学をはじめとする人文諸科学が地理的考察を除いては空論となるように、地理学も亦時間的——歴史的考察を除いては学問たるの資格を失う。歴史地理学の方法は同時に人文地理学の方法でなければならぬ。

歴史地理学と人文地理学とがその方法を一にする以上、歴史地理学において否定された地理学独自の対象という妄見も亦正されねばならぬ。人文諸科学と異なるのは方法であつて対象ではない。地域の特性とか地域性の把握などにこだわるならば、たとえその考察が時空の存在形式になつたものでも人文地理学は他科学の下僕に過ぎぬ。ここに

環境の中心たるべき主体が回復されなければならない。

かつて地理学は世界についての知識であった。その故に Geographia と呼ばれた。世界についての知識とはその世界がとりまいている人間があつて成立する觀念である。主体となる人間を忘れた時、地理学は分解しうちすてられてあれどもなきが如くに見做されるに至った。地理学は世界についての知識を与うるものである。地域の特性とは世界の知識の一環として意義が与えられる言葉である。世界についての知識とは、世界によってとりまかれる人間を主体としての知識である。^{註30}人間存在そのものの分析は哲学に属する故に科学としてなしうる事は人間の世界に遺した文化事象による以外にない。かくて地理学の主体となるものは文化事象であり、文化事象の環境的理解こそ人文地理学である。これは先に歴史地理学が諸科学より要請されたものである。されば歴史地理学は一般に思念せらる如く、人文地理学の一ブランチにあらずして、歴史地理学あつて人文地理学があると観なければならぬ。



としなければ理解の仕方がない。ここに歴史地理学とその現代版である人文地理学を包括した概念として文化地理学という概念が必要となってくる。文化地理学とは正に文化現象を世界内存在として理解する歴史地理学と人文地理学

を表わす上に形而上的妥当性を有する概念である。文化地理学が本来の使命に目覚めて世界形成の理論を与え得た時、あれどもなきが如くとうちすてられた地理学は、『これぞ隅の首石』^{おしい註33}として諸科学の基礎となるであろう。

補註

- 註1 和田俊二 マヤ文明成因論批判 人文地理 昭28
 宮川善造 マヤ文明の地理的背景 田中秀作記念論文集 昭31
 別枝篤彦 近世初期におけるスマトラ近海航路の研究 地理評 昭34の二
 註2 山崎謹哉 歴史地理学の方法論をめぐる二、三の問題 本会第一回例会発表
 註3 拙稿 尾張国富田庄を例とする日本庄園の村落構造 東北地理 昭29
 註4 吉田東伍 日本読史地図凡例 明31
 註5 小牧実繁 先史地理学研究 昭12
 註6 藤岡謙二郎 歴史地理学総説 新地理講座第七卷 朝倉書店 昭28
 註7 ペルリ提督遠征記 政法大学出版局 昭28
 註8 当時外務省条約三課 現カナダ駐在大使官付
 註9 拙稿 Report on the Native Village of Japanese Preadlers to the Arafura Sea Area 1956. 外務省
 拙稿 濠州海域出漁民と母村の動向 経済地理学年報 一九五六
 註10 勝本正晃 物権法概説上 巖松堂書店 昭13
 註11 東北大学法学部 中川善之助教授による。
 註12 図右 所謂山浦地方八ツ岳山麓地方の開拓と関係があると考えられる。

註13 北川 桃雄 法隆寺 マトリエ社 昭17

伊東 忠太 法隆寺 創元社 昭16

金森 遵 日本彫刻史の研究 河原書店 昭24

矢代 幸雄 世界における日本美術の位地 三笠書房 昭27

註14 東方学協会編 正倉院文化 大八洲出版 昭24

註15 Jarvis, C. S. : Yesterday and to-day in Sinai 1936

Johnston, A. K. : New Biblical Atlas,

Kent, C. E. : Biblical geography and history 1924

Adams, J. M. : Biblical backgrounds-A geographical survey of bible land in the light of the scriptures and

recent research, 1934

大屋 左一 聖書の歴史的地理 大12

佐々木 貞一 聖書地理提要

Wright, G. E. : the Westminster historical Atlas to the Bible 1945

この他、最近のものに

Baly, D. : The Geography of the Bible 1956

Barrett, C. K. : New Testament Back ground 1956

Cullmann, O. : The State in the New Testament.

なかんずく、この聖書を未見しぬ。

註19 The Americas School of an Oriental Research in Juresalem,

この他カトリック系のものもあるが、名称を確認する暇がなかった。

註17 新約聖書ルカによる福音書一〇の25—37

註18 Robinson, W.: The History of Israel, 1954

註19 ルカによる福音書九の54

註20 旧約聖書イザヤ書二の17

註21 アンドレ・パロ 聖書の考古学 みすず書房 昭33

三笠 宮崇仁 帝王と墓と民衆 光文社 昭32

註22 矢内原 忠雄 サムエル書 角川書店 昭31

註23 Jach, T, W, Samaria in Ahah's Time, 1929

註24 聖書大辞典 前掲

註25 坂口 保 万葉大和地理辞典 創元社 昭19

豊田 八千代 万葉地理考 大岡山書店 昭7

北 島 葎 江 万葉集大和地誌 筑摩書房 昭31

堀 江 民 一 新橋万葉大和風土記 岡倉書房新社 昭27

犬 養 孝 万葉集の風土的性格 国文学 昭34の一

今井 福治郎 房総万葉地理考 万葉集研究 昭30—33 連載中

国文学解釈と鑑賞 昭27の一は万葉古地理特集その他

註26 P. deSaint-Jach, Roger Dion, M. Bloch 及び Dion, R. La part de la gegographie et celle ilustorie dans lex

plication de l'hat rural du Bassin Pauson があるが筆者未見である。

- 註27 Greenwood, A : Selection of Palon Letters. 1920
- Benret H, S. The Pastons ard thir England 1924
- Gardener, (edited) Paston Letters, Vols 1~6 〇中 Vols 1 の解説の部分
- Burstall, E, B : The Pastons and their Manner of Binham (Annual of Norfolk and Nawich Anthological Society) があるが筆者未見である。
- 註28 藤岡謙二郎 前掲書
- 註29 ハンチントン 気候と文明 岩波文庫
- ハンチントン 文明の原動力 時事通信社 昭25
- 註30 石田竜次郎 地理学の社会化 古今書院 昭33
- 註31 富田芳郎 地理学の在り方 東北地理一九四八(一の一)
- 木内信蔵・西川治 地域論 新地理講座第二卷 地理学本質論 昭30
- 註32 ハイデッガー 存在と時間 三笠書房 昭18
- 註33 旧約聖書 詩篇一一八の22